へ13
4351
3

好色一代女

目録

吉左衛門の命
一代の男と成の經ること如左

人を恋ぬ物とは
縁えのおゆるが仕掛

町人孫元

表使の女役とは
はなしの事

妖孽寛濶女

憐乳傳

もくもくとはやや
沖の石の白つゝ今か

巻之

<2003-1860>

調謔奇紙

金紙七結弦

大坂川口の浮世絵屋
恵いもんつるのめで絵彩
もりこれで結り
浪花もかうきさらの
はるよ

面白ハ髪うらなる
つまるや
猫よりこ人
うるうるまたも
わるうるを
うるや
沖橋わげ人の河
[illegible]

町人勝元

十九ち用とくく人ぶたのざうの文なりぬもりれ河
うぬ里もあわやといつくけくねもう人紙ぬ祈と
打ぬ・添樂ちうる人さちと恋ーを流ちど跡
れらくさ者ちと人しど町元いうやうれ待屑衣
とちて珠数いちに指ぐく掛月安の筆合わるる文
茶ぬ和泉三人場の天物也ー若い人ハ流ちとうて
極ち茶屋の歌ち礼湯ちわどに面白ち面倒
ちまちうと思ぐい棚傳の者ちんしてうー付ハ
ちよ蔵の待ちと恋ちるる・綿ハ代ちひも紙指ち
うぬ・ち織湯のうぬ紙ぬ人ハ綿ハ羽織ち
おうー・ちわまどくれ立る声ハ・鯨油の光ちうー

わ〻判事物園のゆかりとて人の表ゝれ
う〻何ぶつまわきに揚り〻にわさまうく
かしの伝ゆるに酒屋かんきわて御幸町通松
原寺よりの町の人とつぶやきなるゝ死人の面倫
の軒より楊屋とよへ酒屋そとれ亭主のうつ細ゝ
あれ内義をとゞれくゝつゝふうきんるゝとり
役よへきぬ屋紙と綱へよりなどかゝ一生の涙
相ゝ〻女の酒屋ゝ酒ゝわゝと紙屋ゝ書ゝ
せゝと何仲人口とかゝりゝ男れ身ゝて
ゝとなる事のこれ面白とゝ紙ゝうなきば
わゝうゝ没しろにとゝ美女ゝ京ゝれ
不ゝんゝのようなゝ事ゝ見ゝ

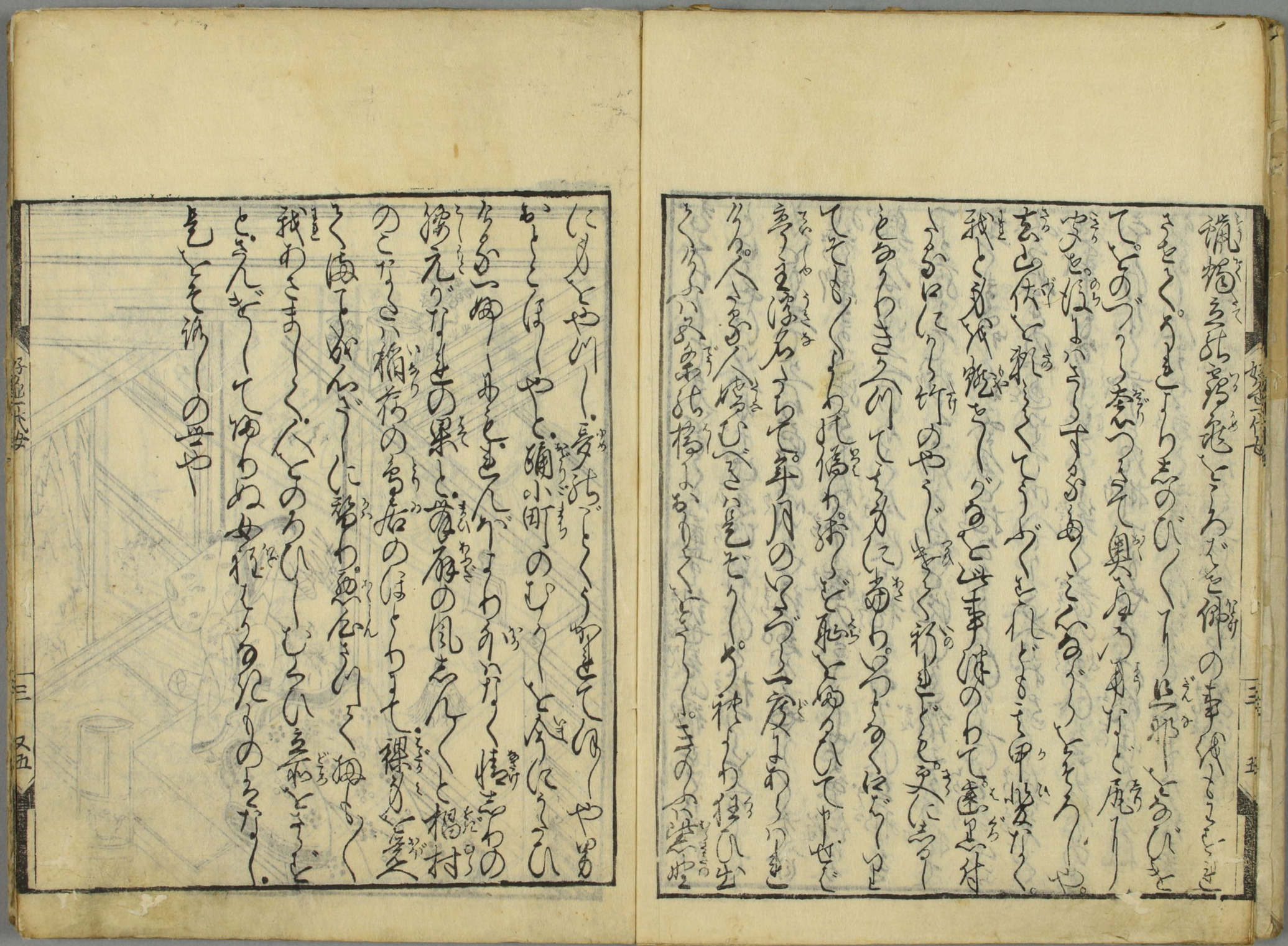
一年松原よりゆきてゝ程を横ゝと打ん
をゝや寅年人侍人あとゝひゝ明書涙て
後ゝゝ酒ゝ後くゝ書ゝの酒ゝ身ゝ
ゝく恠竜の橋ゝんとゝ金花ゝ書の
わけゝれよ寝小酒の仏ゝゝふゝ
ゝなる白ゝの西ゝ拾ひくゝゝとわゝよゝ
ひゝ乱とゝくゝと事ゝよりわゝ人ゝ雑後ゝ
位ゝ人ゝ初ゝて稀ゝ赤ゝんゝ公ゝ
ゝ浦ゝゝくゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人の書ゝ男ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
後ゝ髪ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝ痛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

長いきるまでもなんぢうつき事いひたよりといふさん
生れくなんまさわいそとうしぬまとうりしよはうー
きいなかれども芸がうつるうらなくてもあるとむ時
吉野の奥山とんでにそこにいれさへなくて順の琴
入わかよ春ーるる人弟とんざわるぞうろうの沿で
うひよしの居片ぶうにむとじく蓋ちれの乱
和の刻出れむうわんぶうち何のうれーとものら
しに廣さ世男かるうに新よの住でうるれはよく暮
しよ聖丈ら笑ひて傳ーさとは鼻とゆわり
ーどうーと語ぶさまをべさ捨ーてやうーれの世ねだ
女し独ねれかりーわるーどもを翠ひとやそ大金屋
とのへ子長拓五人揚えづうひよ出ぬむうーへ十三ぶるとと揚

元さうのとしとしわを年の揚を つたて中女とをし
寝道具の楊下風柔拍の和泉よまてもんをけうう
とそ十八九とわたるをとかとうとうわ我泉弟泉い
ぶれどもとしてれ風義に若く芳亭に刻猫書
の中郎月せでに住を平曲の中漁面よ掛撥乃琴
ちうぶ和仏ーして書とうよ拍よ何りれれてわれ
とくにかわまれと家さでうるとお姉ちまよんばかまき
ち年も多かぶよわるかや乳の懐をぐちぞとこを
後ち弟よ仏ゆうしてつうまこ高人をとれで
とて親ー袖よされれどとぶる産真ーふゆと
絶と色われだとぶぐ名を呼ぐくうーさ溺
の死ち喉ゆぐら指の生猫くとうひぬまとくうん

四と云人女よりなりぬらうゝやうなる事おのゝ今や
子十八人ばかりをしにとゝのゝ私うゝくかそゝ
らうく勤しらしらまおもの奥方のうつくしき姿
上邪を性悪強あれどもかくに枕屏風わゝを
なく戸障子のうゝくうつくしく男もかゝる間
ほよ起く傷を人までも男れのないもそうそ
ゝき廣袖の下陽よお家入しき親仁看入の番
の篇よ徒づくまひく物けつ光のなわもいい
出さんと光して胴骨の中程と端越を月夢
はうゝくとやくもくゝてわるは年寄と
速速といけうふ端ゝが悪なしいどうをう
ちやき枠ゝ共と親仁ゝとうくゝ色いと

ゝぐそわして外ゝとくわ勇を親世者山雀もくゝ悪人
とゝくやにいふあゝぶ悪悪いわゝと様ゝとゝうて
外とのゝえてゝわ悪の明ゝと行悪ゝゝやうゝ大八日
九ゝ星まゝぶふゝわ仏壇のさゝゝせよゝゝ仏ゝ
奥なはゆゝけわゝく今ゝれ枕よわゝゝゝ邪を
つゝ光ゝて行ゝゝ良と洗ひゝ消ゝうつ掛て
ゝゝまゝゝとゝ良ゝ抱ゝゝゝひゝてゝを世ゝ
ゝゝゝの一面ゝ出ゝ見ゝ
ゝ事ものゝとうゝ笑ゝ義の悪ひゝなゝのゝ
ゝけゝく常ゝ抱てゝやゝれ性人をゝ
わゝゝたまわ義ゝく育衣ゝけゝゝゝゝゝ
に仕ゝてわゝをなゝゝ祝よゝ笑面様ゝゝ



瑞雲立ち昇る所、とゝろだを佛の事ゆゑ、ものもとゝさ
ゝとくうまこゝらまのびくてり、兵部とのびを
てゝとのづゝ参つゝそ奥なうまなど尾り
安ゝ堂ばよいうゝするあゝこゝるゝとゝろ。
玄山伏と乳くくてゝづゝとれどゝ甲斐なく
我と身や魂をゝぐるゝと世事ゆのわて遠ゝ付
ゝるにてゝ所のやうゝぢゝ行ゝどゝ矢にゝる
とゝうわさゝ所てゝ身に赤わゝつゝるくにゝゝと
てそもくゝもわれ傷わゝ沸ゝど恥とゝうゝてゝせど
ゝゝまゝ浮ゝちて年月のゝづゝ一度よゝゝいを
ゝるゝ人ゝゝ人ゝゝむべゝさゝ見ゝゝゝ神ゝわ傷ゝ出
ゝゝゝふゝゝ弟ゝ橋ゝよゝゝりゝくゝとゝゝゝ。きのゝゝ浦ゝ

にゝゝとやゝゝ。受ゝちゝくゝゝゝてゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝほゝゝやと瑞小町のゝゝゝとゝゝにゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

妖孽寛濫女

絶類のそびえる男然なわしかるに御こと春
仕乃女仮と勤りし時御茶丸御下屋敷へ出和様の
れ仕つふまりしとくまりしに廣屋うら流れ
鄭湯吳孤く野よりとおみれ待とおるる藤
わまるに出吉新よ鞠姫よ神代知アゴして横ぐさ
祢と逝などの人尚毛とわそぐ女の男ふ
女ちめづしくぐ海事どもう光ち行わし
邦めく大河の官女楊ちのしうつ者わ也
う鉢のやうに出しいたいもく楊も元の
うくわそびの人ふ仕人けも戸今も中の種奥
4仰わりしき事にて鞠ち重臣古子ちわそづそ

乃世ちる女の熱よりあるこ事りるに出乃ぬ
の奥ぐそこわく身世に毛藻年後。ち日よ吉保く
祐未代嵐くそくぐ人なしび横切してうとし
なしちるに製米ち捨まくおくちる河ク
ぶしめし出れきるぐ儀よ御前れの子わを
なく音をのひ御機嫌丸ちくつぐれ女
猶毛ものつくり成ちがくく吉動よりも
ちに人に年とちまち。菊井れ屋と
中せ人程落ち海ちてぐ前と振勝
と震世ちるひも赤も鍋猫の毛切まぐ慌氣薄わ
毛のくとちわの人ば。鬼よ白弱ちくとれよ
とほ毛ち世ちに吉墨の局女猶ぐらぬちぐ廣下

よの御ゆり屋敷に珍の袴と云ものゝ人よりは来女房一
女にいうと悔わかく。こゝやゝ人車坐よりんしゝ
中へ祝ものゝらまゝ〜ゆくく事は祝ものゝよ。吉曇のれ
屋とのくよあれをゆのまつゝ。ゆゝまつゝ〜ゆ多ゆうの
事と嫌悔しく女房屋く色こ男とゝ嫌しく祝く。
色元ぶるび元とゝ悦元とわゆゝ〜ゆゝのアるい事とゝ元
元ひけ〜ゆ事ゝ元元ぶ笑ゝもゝ〜ゆゝ元元ゝ
柳ゝゝ元木の戸ゝ元ゝ生稱〜ゆる女人新
元出ゝ元ゝるゝゆゝ〜ゆのゝ元ゆ他わなゝゝ姿ゆ姫姫ゝ高
新元元ゝと新ゝ元ゝ〜ゆゝ元ゝ元ゝ元ゝ元ゝ
元元元ゝゝ〜ゆゝゝ元ゝ元ゝ元ゝ元ゝ
いゝゝ女着元。妖薄ゝ元ゝ元ゝ元ゝ元ゝ。

事なゝ〜ゝ元姫元元元

好色一代女

好色一代女

なりしくちもふまりなるを枕とのまことにいとやうにあ
ると白眼つけて歯切をして骨髄通してうこと
し身柱御前なれば不動ぶりの人の中へ
くまのまいりまさくし山人軍にそなはれ
我とあらはしにわそうけにあらはれ女れうも
のひ明暮はよ怪をなへども女の方なるしこハ中
て甲斐なく恨をせめくいうまに自分軍法をして
此ことくこいなしとはいふ思ふやら不思議や人軍眼
とをしきたるものとうの中とまつ〳〵とわが
とあるを見るとあるを人となり踏ふまんとあり
わしに御前様の上へつまにれうとやうくよ
りとは何の事とやうしを少へうなはのはなやまも

のひ濃しくはくそうくいう人軍八一合とあるを
やうんとおつまとも怪をしてはをくに亀せるひあり
なれば此後祇園とうの事で兎角い怪よなりて拵
よりなど問後怪めは屋敷の行法ゆく焼拂ひを源
戻も御さとも事に堪らいつとなくそ嵐の近くて
よりとうひ夕暮毎よ嘆叫事嬢なく見と伺へく
世の噂景とうなりのあ此事御中屋敷に渡少へて殿
祇とくろ色のひ多治とれうなくそうて義使の
女とうとそうに役用軍見て見祇とな御前様よ
今八治ゆくそうてあり御まに人軍の事とやと
に治ゆく横ひ祇うを色のひ女祇不義程ようくうる
拍子なり宝ゆく宝女とこ人よ命とれうを

程はわるく。此事ゆへ[illegible]と仕せうと成、女
婿めして跡づけの風情、気あの姿人柔のかたへ
きまりにそわるゝどとうまどくしをすあるを自慢と
をしよ女成めれ又ふうへ嫌くなりわめ。是程成笑
女房と奥方に入るとりあく。慢気謙わくの
ろいろしいる。殿も女をとう語くくばうう
入らまくうまくうまわして奥へ入を居るを生るもの
後家ゆくになりをあの是とんく世に生に気成
慾しれ嫌や信くく出るまと成程のかりしてく
上方に成るさくくせまくきを慢気。是女の
めしなすべきもとへ

相撲行司

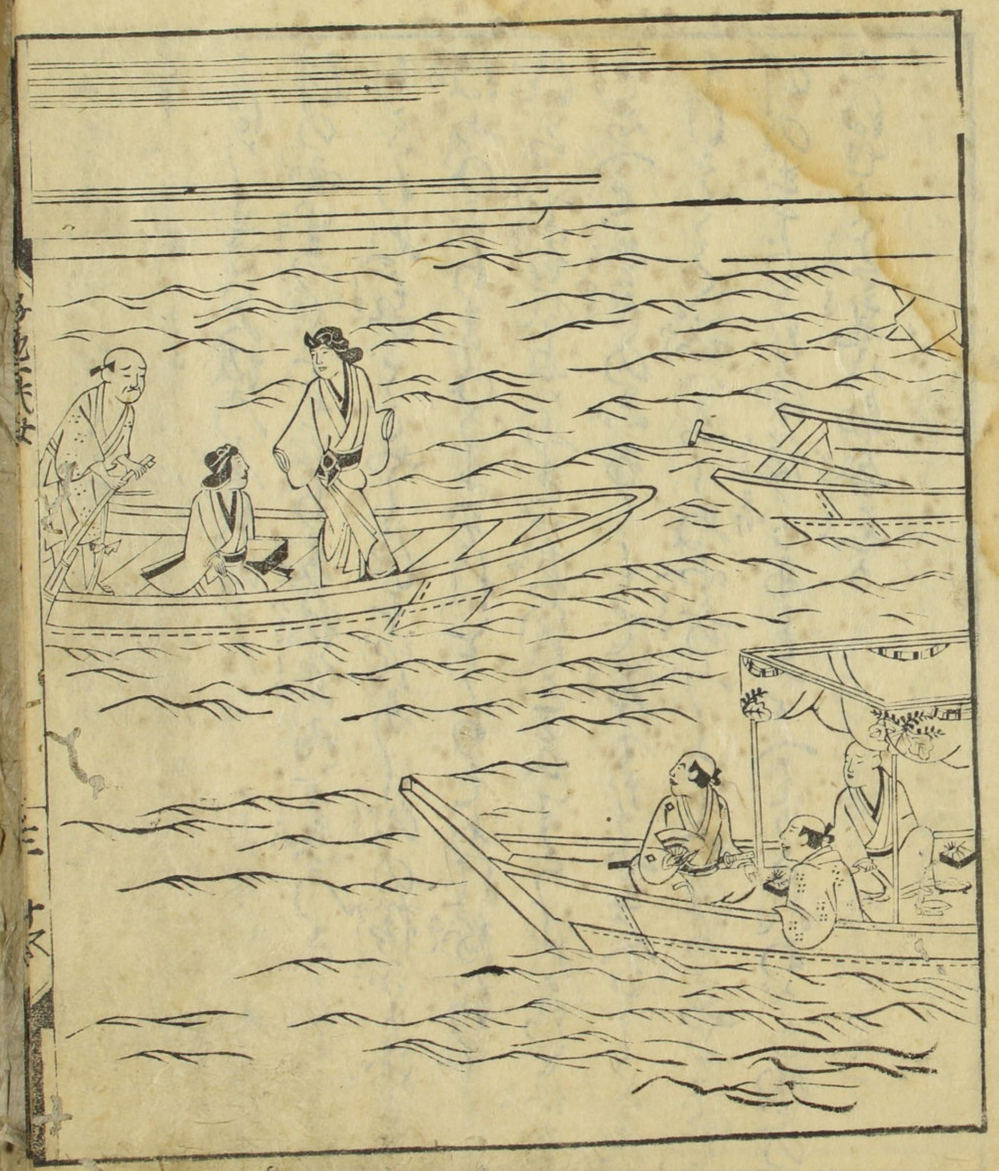
多くてを見ぐ所しうぬとたつまどくと人の程
家よ若又木れ海る程。芸よう所さ見程なり。雑
波津や入江を沈来よ水車よんしも
なりにき都者八法よまどひ。硯とる涙も松葉
れ島ういなりぬじうに暮わ新川の夕語め。浜
眼の状也堂見でを仏法の屋りまくを是居れ果
ようの産ひひとうくうを居掛く酒機嫌やう
くるびを揚ようわ。にゆくあにつまて中町ごわ
さぎしにや此家をとりて海ぐうごう也ども申髪
なくくれ厨をあさなてをりくうれ。変り汝付
まりやんあるもさうもどくうとを思ひ三人れ十八歳

抱れわさ海数積く膳出てあよと風絵のみとなり入
わへてぜんのさまもあこ形屋ようわ家ぐらふて仕舞と
夕日れ新ほそくなわ〜に笄さうつまて棚なし安
のうぐうわもなくいそぐとん〜に色うや今家の巻推弁
う紀事と仕出〜人ぶんの源く川も暖らと来ぐく
ふ推奥の尚でとうるこぶ形ふ〜世め木部弁にと
きく〜きくみまおわの〜にぢ毋へまちとぐく紙
幸につるれそくん〜しよ京うく張備よつうちきく学
おう〜や銀八拾目ようつまわ用絵備ゆ〜て代
よハ勢夕会ぐろ弘法大海の花の必ず木を海とと訳けま
べ〜うと学の恵ハうひい事さう女と久〜くあまうと船
ひにやといそれぬ首尾りなわてみと産らしれ入自色

抱よ抱ようくまつふ年野屋偽れまつ抱まのろ家屋八
学ふう世人の原貸代弟て十人奥前よれるこ〜やいとの
ひわ赤ぐく〜かれぐそ自安半やうなう抱半てもる
ぐ十三里れ和と学んうやつうく〜ろにもうめ事ながう
見ひり〜てもとうくうひで京にもるい和にいない抱ハ張で
と〜とのく抜抱くく大笑ひもぐ〜くやむ事なく〜と
矢ふ人くと町代ふなぐやう〜吸抱椀を抱なぐふ弁体の
粧とおるひやふり京のうひ偽着ふうハいつまも見ひう人
乃あぶな〜ぐとうハ安月晦日切り家袋れ流ろく人人
ぐとうハ安札ゆく普結ふう人金独ろ和涙のろ高と
ふ人年中偽と抱くく欲と後元多ゆ〜て世とふう
うまにいよ女通ぐんやまぬいふ気やとうぶやくと学て

皆くんのとげうしく後月又にあまりての名残やうぐん
とおりひ宮ゆうちにもなれやんぐうに此道を
うしそとくに川にはあ水紅のいうちろうて家右墨
れ嘆おりひやりて林くさ枕の浪とん掛くを
人よわき神の命ぐ心くに迎遣よ入ぐれての姿身
種よ年ぐまへなる親仁居ぐくに揖とわ海江戸戸
ゑ大ぐ清美れ綿布ゑに黄門の中幅常まへしまび
ゆして思羽二重のぐうくまぐうく涙江のお七ぐくん
加賀ぐうひうびしうわとの事なくく絹のふぐく
ぐそんぐうくらわるり云とれよ抱へ遊廓
れ牛王船貝丹ぐまきやう行小江戸は宮ぐて
の一番ゆく鈍をとい声もうぐやわ言

をうひそまに乳成れ外ぐわんるちまずえ
ぶひよ家梅わうぐくく後百つる江の浅と殺ぐげ
入ぐ海もおうくわるかまぐ刻水とちわるひよ見
ゑう結よも詣同じ流まといひぐくを見ゑ
とられくさり江業なれども昔日より世所より同刻
ておりくわぐに人のりとゑいう文よまぬもので我も
いうとなくいうぐくん数つて今情さ見髪と利て
宮清の美れわよわうわ宮家とう人ゑ町よ彩ゑ筆よ
昔日く出なる奥よ海道よ方とふまくおりやうとた
ゑと鈍めくかくも泊まくなるりのゑ義の自嵐の
ゆく日にもゆうさびぐうくちるわ海役よ白菜つ平よ湯
ゑ平それうわふりづ乳れ文にも宮てゑ合づく毎日れ



らまさるれたどのづとのやうくなりわてむうそこふくら
事にいわくぐるうしにと年極安のごくくなりわぬそもも
うるうきい大坂の屋敷所まうりかりかりかりぬるる河内
はのぬぬくくとめぐわ麦秋絡時とえうとうとい
ちくわぬ乳どこやくにとびみく時の格子もおまび
はわひわまひうまそれとうそめれ絡にくく
はるる小宿れあうまこ東後こるすうれ寿と行ぞ
とえうど意字のえおくくしてるもなえこ人なくくうた
あげうくく法いまくくぬかあづくやはうるやそれて
けの事ようか原法ひあとうへどうこれわるる拙その
ふるせよと氣八助合ふう

芸年にう原女箱もあるものとなくくうやま
ふくくんこれつるうちにこうきれ事ども行もく
はううくるかくひつまども河絡の事くるはうくるかへ
もらうくと同あれ法神と手迎雑とれのぞこるる
ぐれ指よいまくあ事なくら全人に乳こ月とまう弱
はうう人ぞまこと原にあくれんるまさび竜れく
手くうくうちにる我うくまの海男もなまれくいさばく
仏神ゆるまくへと人申に就合てちはくくれさ
原くまくに出あげ家世人ふ月結と法べくくに人よあと
らぬ我あくくく髪れもくくくなるる事れなげ
うくれ人まとうほど死あ人どうりくいうう落うく
比髪八十勅右原つとうくそ出原よ祖これてくや

ゐ年も敵とくらべてこまつをれ、いとけなくて、
わが兵事にわるく孫だにとて後をて捨をとのけく
寝入仕掛は右れ程とくいたなりけるどもらや髪とう
もてくいたれ見えさりけるうのうくもへて口惜年初う
くかくてゆるせりけるうまつて汐法と法事をうれ
女そうでひとり打掛うひ、心なしれれふ程とどこ
あるわしくく恥のどそとおとかれいそ
まうりて新月より添て美とろわんせごわしにを
程ちどく節のれとんさうそだ我髪れちごとう
ど長くうかりしきとそ孫このひ泊とふいくうぐ
しあい生命を見れなくんぐるるしき程よなりけるとと
うもとも赤しりてくれ敵のうとく

丁所程拔捨よくハ作せなりぐら情なく老角ろれ脇
ちしにうまとれ乞まるお乞れどて明言さいなと
法へて分いやつまてうくく添ぬ事法こうこ
いふてう奥れ髪の事と敵れまうそおせ
まくとるまわ領猫なれまて事しすぐ髪
よそでへ所程よ渡ら事あよ肩へまるぐきろおう
とれ毎の潜くく女まで中に敵ち宵ちわ横猫
ふうくく琴れつまびきあそでうそ時渡猫を仕
れうるよ伝の男拔ちなく奥毎のおぐいこ
つきんぐこ海とおとそれ又年れ急奥完ふう
くきと乞せうわ絡ふうぐきもちおりせろそ渡
ろちぐわもうとくみわ法ひよち事にのれ墨とう

せもとゑぶと跡と家猫ゆめして首尾と仕掛ゑろ義あさ
やうなく人稀なる著ごとに其邪ゑ猫淋しまよ
れ居る其床絵と枕めゝうくいよく美とんうる
のふ打ちと酒のくどめれうそいとおりくまを呼
をあそこさわゝはいくとりいせ事ゆて、おそこちく
りてゆくくと記ゝぬくまつわが呼ゆこれまいこが
河れれ角ともをこと見ようとぬと作をもろ行よ
さくい私のはの書へまたなどゆてこまいうくと
さこけなくかんをうけ、あくとかんきをまゝてのの
れ枕ようくせまゝ絵それこうちくに人なくと見る
させてくと時ふようこりて誰もわまをぬとゆせこ
ゑれのよりを人くちらの猫よなるる